

スモールテスト実施と日本人学生ボランティアを活用した 日本語補講授業の試み

2004 年度補講コース SJ3 - 1、SJ3 - 2 の授業を通して

許明子 小河原世津 長谷川守寿

要 旨

筑波大学留学生センターの補講授業 SJ3-1、SJ3-2 コースでは 2 学期と 3 学期に毎回の授業でスモールテストの実施を試みた。このスモールテストは、1 学期の反省から 2 学期と 3 学期に実施するようになったものであるが、授業内容の復習を促すとともに、出席率を高めるのが目的であった。スモールテストの実施によって授業の出席率が高くなり、学習動機の向上、復習の定着などの効果が得られた。

また、日本人学生をボランティアとして日本語クラスに参加させる活動を行ったが、留学生に日本人と話す機会を与え、会話練習の相手として活用できた。日本語クラスにおけるボランティア活動については、留学生はもちろん参加した日本人学生にとっても、日本語の練習及び国際交流の場として非常に有効な機会であったことがアンケート調査から明らかになった。

【キーワード】スモールテスト チェックタイム 日本人学生ボランティア

A Trial of the Japanese Class Management which Utilizing Small Tests and Japanese Student Volunteers on the SJ3-1, SJ3-2 Courses at the International Student Center, 2004

HEO Myeongja, OGAWARA Setsu, HASEGAWA Morihisa

【Abstract】 Within the framework of the SJ3-1 and SJ3-2 general courses held at the International Student Center, small tests was administered in each lesson during the 2nd and 3rd terms. Implementation of this test in the 2nd and 3rd terms was carried out on the basis of the 1st term course, and aimed at a review of the content of the lessons', and to improve the attendance rate. Giving these small tests resulted in a raise of the attendance rate, improvement of study motivation and consolidation of the reviewing methods.

The participation of Japanese student in volunteers the classes allowed the foreign students to practice their conversational skills with native speakers. This chance to improve Japanese language ability, as and the opportunity of cultural exchange, received high marks in feedback questionnaires.

【Keywords】 small test, check time, Japanese student volunteer

1. はじめに

本稿では当センター2004年度補講授業の中のSJ3-1、SJ3-2の授業について、スモールテスト実施と日本人学生ボランティアを活用した授業運営の試みを中心に報告する。本学は3学期制で授業が行われ、留学生センターも学年暦に合わせて3学期制で補講授業を運営している(加納2004:93~108)。

2004年度のSJ3-1、SJ3-2クラスの特徴は、1学期の授業運営を通して生じた諸問題の改善を図るため、2学期と3学期は毎回の授業でスモールテスト(エブリデーテスト)を実施し、日本人学生ボランティアを積極的に活用する新しい授業運営を試みたことである。本報告では、各学期の授業運営、反省点、ボランティア活動の成果などについてまとめる。

2. SJ3-1、SJ3-2クラスの授業運営について

2.1 1学期の問題点

まず、SJ3-1クラスは1時間目に行われたため、大きな問題として学生の集まりが悪かったことがあげられる。このクラスの授業は、週4コマ中3コマが1時間目(8時40分開始)に入っており、他の教育機関に比べると若干早い開始であった。そのためか、1学期は定刻に集まる学生は一人か二人、ひどいときには授業開始時に全く学生がいないこともあり、また授業を始める時間になっても机の上に教材が準備されておらず、教材忘れも多く見られた。

このような状況から、学生がある程度揃うまで、前回の授業の復習や、テストのフィードバック、宿題として提出予定の作文のチェックなどを行うことで対応した。具体的には、『Situational Functional Japanese』(以下、『SFJ』)のDVDで会話を確認したり、活用表を用いて復習したりしていたが、実施内容は学生の集まりによるところが大きかったため、一定していなかった。

そして、学生が揃い、授業を開始する際には、Structure Drill(以下SD)・Conversation Drill(以下CD)の復習としてディクテーションを行った。ここでは、学期を通じてとくにカタカナの間違いが多く見られたが、本来の復習目的である文法の間違いより、結果的にはカタカナ表記の修正に終始した部分があり、本当に復習になっていたのかという点では疑問が残った。

クラスとしては受講生が8人で、人数の少ないクラスではあったが、活気があり、楽しく学習活動はできていたように思う。その反面、前述したように遅刻が多い、授業への準備ができていない、復習がうまく機能していない、また集中力が続かず日本語以外の言語(中国語・英語)での私語が出てしまうなどの問題があった。なお、評価は、最終テスト1回(40%)、Small speechを4回(各発表10%、小計40%)、コース最後に行う最終スピーチ(20%)により決定した。

一方、SJ3-2クラスは2時間目と3時間目に授業が入っており、出席率の面ではSJ3-1のような著しい問題はなかった。1学期の授業では、SDの授業をしている間には前回の授業内容

の復習として、短文のディクテーションを行っていた。これは、前回の SD で学習した内容の短文を 5 つほど教師が読み上げ、それを学習者に書き取ってもらい、それをチェックして前回学習した文法事項を中心に、語彙や漢字などの表記についても理解や定着度などを確認するためのものであった。

クラスの特徴としては、受講生が 16 人でクラスのサイズが大きいこと、日本語学習歴に関しては来日して日本語学習を始めた（学習暦は約 6 ヶ月）初級後半レベルの学生から、日本語が専攻の交換留学生にいたるまで様々であり、漢字圏・非漢字圏の学生が混在していた。したがって、学生の日本語力の差、特に語彙力の差が大きく、予習・復習を宿題として課した。しかし、SJ3 - 2 クラスも 3 - 1 と同様、授業を行う前の予習と復習の確認、語彙理解度の確認が必要であった。

2.2 2 学期・3 学期に向けてのカリキュラム編成

1 学期のコース終了後に SJ3 - 1、3 - 2 レベル及び SJ1 - 1、SJ1 - 2、SJ2 - 1、SJ2 - 2 レベルを担当する教師による合同ミーティングが行われた。SJ1 レベル（『SFJ』の Vol.1 を使用）、SJ2 レベル（『SFJ』Vol. 2 を使用）、SJ3 レベル（『SFJ』Vol. 3 を使用）のクラスは連続したレベルのクラスで、教科書も同じ『SFJ』を使用しており、実際進級によりクラスを継続して受講する学習者も少なくない。しかし、SJ1、SJ2、SJ3 クラス全体について担当教師全員で授業の進め方などを話し合う機会があまりなかった。このようなことから、SJ クラスで学習者にどのような能力を期待するのかというレベル自体に対する認識を共有し、教材の利用の仕方や授業の進め方などに関して、一貫した方針を話し合うべきではないかという提案から、各クラスごとのミーティングだけではなく、SJ クラス合同で SJ クラスカリキュラム会議を設けることになった。

そしてカリキュラム会議の結果、SJ クラスの共通認識として次の点が話し合われ、2 学期から変更が加えられることになった。（以下、カリキュラム会議の資料から一部抜粋）

【コースの目標】

- ・ 初級文法を定着させ、各課で習った文法項目を使って、まとまった内容を正確に話せるようにする。
- ・ CD の練習は最小限に押さえ、SD の練習や文法項目の正確な活用を確認する。

【授業内容】

- ・ 各課の SD：3～4 コマ
- ・ 各課の CD：それぞれの課によってコマ数を調整するが、必要最小限の CD の練習にとどめる。
- ・ スピーチは最終スピーチの 1 回のみ行う。

【評価】

- ・ **各課のSD スモールテスト(10%)**: 1学期のディクテーションの代わりにSD スモールテストを行う。SDの授業をした教師がその日のSD内容でスモールテストを作成して、次の担当の先生に渡す。SD スモールテストは従来のReview Sheetを編集して採点しやすい形式で作成し、ディクテーションとクイズを混合した形にする。
- ・ **中間試験(20%)**: 前半の2課分のテスト
- ・ **最終試験(20%)**: コース全体4課分のテスト
- ・ **各課のSD Oral Check(40%)**: 各課の文法項目(SDチェック)の達成度、最小限の会話(CDチェック)能力
- ・ **最終スピーチ(10%)**: 全員パワーポイントを用意し、まとめた内容でプレゼンテーションを行う。

各課を学習する前に、その課での到達目標などに関するハンドアウトを配布し、学習者にどんなことを学んで欲しいかを示す。

各課の評価基準(SD項目、CDの内容)を明示し、SD・CDで練習を行う。タスクは課によって省略可能とし、省略した場合は自習とする。

チェックタイムを設け、学生が各課の目標を達成できたかどうかを確認する。

【オーラルチェックタイムについて】

- ・ **CD練習(1コマ)**: 各課のCDの練習は会話能力を養成するための最小限の練習にとどめる。チェックタイムで確認する会話内容を中心に練習する。
- ・ **チェックタイムの準備(1コマ)**: チェックするSD項目、CD項目を練習する。教師は学生各自の問題点(発音、イントネーション、文法項目)をチェックタイム準備シートに記入し、チェックタイムの時間にそれがクリアできたかどうかを確認する。
- ・ **チェックタイム(1コマ)**: 教師は学生とボランティアの学生に文法項目を話させたり、会話を行わせたりして、スムーズにチェックタイムができるようにする。その後、チェックタイム準備シートに基づいて、学生各自が準備した内容がクリアできたかどうかを評価する。

2.3 2学期・3学期の授業について

2.3.1 スモールテストの実施

SJ3-1クラスは、2学期は前学期と異なり20名ほどがクラスに登録したため、教室がいっぱいであった。2学期から新たに補講クラスへ入った学生は、習得できていない文法項目も多く、復習を適宜入れながらのクラス運営となった。

そこで、2学期からは1学期の問題を踏まえて、授業開始時にスモールテストを導入した。実際には、10分ほどの解答時間で回収し、その際ざっと全体の出来具合を見ながら、その場で

簡単に口頭でのフィードバックを行った。授業時間後、テストをチェックし、成績をファイルに記入したのち、用紙をファイルに挟んで、次の授業担当者に渡し、返却と確認をもらった。次の授業時間では、まずその日のスモールテストを行い、その後で前回テストの返却と、その時の間違いが多かった問題の答えを確認するという流れをとった。なお、このスモールテストが評価に含まれることは、事前にオリエンテーションの段階で明言した。

スモールテストには、SD からのテストの他に、リスニングテスト、語彙テストが含まれる。語彙テストは、新しい課に入る際に、その課の新出語彙から作成した。ここには文法項目は含めず、SD ドリルをやる上で必要な語彙を中心に作成し、学生には準備として、事前に配布してある Vocabulary check の宿題をやってくるように指示した。

テストのサイズは、10 分程度で解答できるものとし、SD の担当者が授業で進んだ部分の SD から問題を作成した。中にはその時間では習得が十分でないと判断した項目も復習として含めるようにし、一方で教科書の SD の部分にはない動詞を使って問題を作成することもあった。実際のテストは一回あたり A4 用紙 1 枚（両面印刷の場合もあり）で、時には 15 分ほどかかったこともあったが、概ね 10 分程度で解答できていた。

テストの作成にあたっては、まず留学生センターの状況について説明しておく必要がある。紙で配られる教材は全てデジタル化されており、教員全員がアクセスできるハードディスク上に管理されていて、またネットワークスキャナーも使用可能である。このため、テストへのイラストの取り込みが非常に容易であり、さらにOCRソフト（2 学期はソースネクスト社の『読取革命』、3 学期は Microsoft 社の Office の最新版でそれぞれ対応）も使用できたので、入力の手間も省けて便利だった。これらのツールがあれば、テストの全ての内容をゼロから作る場合に比べて、教科書や復習プリントなどのイラストがそのまま使用でき、カット＆ペーストが可能なので作成時間があまりかからずに済んだ。

1 学期と比べてみると、2 学期は授業開始時にスモールテストをするようになって、学生の集まりがずっとよくなったこと、また、スモールテストのサイクルに慣れることで、復習をするようになってきたことがよくなった点として挙げられる。また、授業前に学生たちはテストの予習をしていて、集中しているように見受けられたし、実際に次の課題への移行もスムーズであった。さらに、前回の授業を欠席した学生のなかには、どういう方法で知ったのか、前回の授業範囲の勉強をしている者もあり、それなりの学習意欲を高めるのに役立ったと思う。各学期間での成績の比較はしていないが、このような復習を兼ねたテストによってある程度活性化されているのか、授業を進めやすい印象はあった。授業報告をふり返ると、1 学期は文法の復習に関する記述が多いが、2 学期・3 学期は発音の修正に関する記述が増え、SD の時間内に音声指導が少しずつ行えていることがわかる。

また、2 学期に実施した中間テストは、5 ページからなり、すべて記述式問題であったが、制限時間より早く終わった学生も多く、スモールテストで毎回文法を確認した成果が現れた学

生が多かったように感じた。ただし、3学期は学生の授業中の学習態度については、2学期と大きく変わることはなかったが、雨・雪などの悪天候や、この時期集中授業が多く開講される影響などで、授業開始時の出席が少ないこともあった。よって、スモールテストの効果も、実際には学生側の状況によるところが大きいと言える。

一方、SJ3 - 2クラスにおいても1学期に行っていたディクテーションの代わりに、2学期と3学期にはスモールテストを実施した。1学期は、『SFJ』の各課の学習が終わった後に最終課題であるスモールスピーチを行っていたため、場面・機能による口頭表現ができるようになるという『SFJ』の本来の学習目的である、SDとCDのつながりが明確にならないという問題があった。これは、SDで文法事項に関する練習を行った後、CDでどのような練習をしてどのくらいまでの会話ができるようになっていけばいいの、という共通認識が十分でなかったことも原因としてあげられるであろう。以上を踏まえて、各課で最も重視する内容と到達したい目標を最初に設定することにした。そして、学習者にも分かりやすいようにハンドアウトにして各課の学習前に配布した(<資料1>各課の目標ハンドアウト参照)。

1学期に実施したディクテーションでは、その日のSDの授業を担当する教師が、前の時間のSDの授業内容から、ディクテーションの短文を考えて行っていたが、スモールテストでは、その日のSDを担当した教師が次の時間に行うスモールテストを作成した。そのスモールテストを実際に行うのは次の時間の担当教師で、採点もスモールテストを実施した教師が行う。また、テストの形式は単なる短文の聞き取りではなく、出題も各課や内容によって様々なものになった(<資料2>実際に実施したスモールテストを参照)。

このスモールテストの導入による利点はいくつかあるが、まず、自分の担当時間で行った授業内容に関して、確認したい点についての学習者の理解度、定着度などを見ることができるようになったことである。実際の授業の進捗が予定と違ってしまう場合があるので、授業が実際に終わってみるまではスモールテストの内容も確定しない、という点では以前より教師に負担がかかることは否めないが、機械的に各課のSDごとに問題を準備しておくよりは、そのときの授業の様子を一番よく知っている担当教師が、的を絞ってそのときの学習者に対応したものを準備することができることは重要である。また、成績に反映されることで、学習者の方でも授業に対する取り組み方が熱心になり、前の時間の復習という本来の目的も達成されやすくなったといえよう。

2.3.2 チェックタイムの実施

1学期に行っていた各課のスピーチを2学期と3学期ではオーラルチェックタイムとしてオーラルテストを行った。このチェックタイムの項目に関しては、各課の最初に学習者にその課の課題を提示し、最終的にどのような会話ができるようになるかを具体的に示した。それによって、CDなど時間の関係で学習内容に何らかの縮小が必要になった場合でも、中心とする内

容、省略する内容の選択基準が明確になったといえる。

実際の授業では、チェックタイムを行う前に、その課の会話内容に必要な構文を準備する時間を1コマ設けた。チェックタイムの確認項目が具体的な項目になっているので、実際のチェックタイムに向けて学習者は各課の重点会話項目を繰り返し練習することができ、発音、韻律など、音声的な指導も個人レベルで対応できるようになった。また、個人レベルで対応する時間を設けることによって、教師は各学習者がその課の内容をどれだけ理解し、身に付けたかを確認できるようになった。このようにチェックタイムを設けてオーラルテストを行い、最終的に課を締めくくることによって、学習者側にも、どのような口頭表現能力を伸ばすことが到達目標なのか、そして自分がどのようなことができるようになったかが分かりやすくなったと思われる。また、これまで縮小・省略されるために内容がぼやけがちだった CD も、チェックタイムという課題が示されたために中心部分が明確になり、到達したい口頭表現能力、それを実現するための会話練習としての CD、その会話に必要な文法練習としての SD という流れが分かりやすくなったのではないだろうか。

実際には、チェックタイムが個人作業、あるいはダイアログ作りのためのペアでの作業になるために、自習のような雰囲気になってくつろいでしまう学習者や、休んだ授業があったために、教師に質問したり自習をしたりする学習者が見られる場面もあり、本来のチェックタイムとしての機能を果たせるような工夫はこれからも必要だろう。

2.4 2 学期・3 学期の問題点と今後の課題

2 学期と 3 学期におけるスモールテストの実施は学習者の学習動機誘発や出席率の向上など、コース運営に非常に効果的な活動になったが、反省すべき点も残っている。反省点としては、例題の提示が中途半端になり、こちらの期待した解答が出ていないことがあり、しばしば甘めに採点しなければならない時があった。クラス運営上、問題作成にあまり時間がかけられない中で、学習内容に対して的確な出題をする難しさを感じた。

また、新しい課に入るとき、その授業担当者が語彙テストを作成するが、クラスの流れから必然的に、SD の 1 番からのタスクを担当することになってしまう。よって、授業担当者にとっては、語彙テストの作成・採点に加え、次回の授業のためのスモールテストの作成が必要で、負担が大きいように感じる。そのあたりの分担の変更は、今後の検討事項となるだろう。

同様に、スモールテストにはリスニング項目も含まれる。リスニングの練習としては『わくわく文法リスニング 99』(以下、『わくわく』)を使用した。リスニングテストをスモールテストとして行うことにより、授業中にリスニング練習に集中するようになったり、自主的にリスニングの復習を行う学生が増えたことはスモールテストの実施目的が達成されたということの意味がある。しかし、現時点では各課で扱う文法内容の理解度を測るためのリスニングテストは作成されておらず、その課が終わったときにリスニングテストの問題を作成したが、録

音や編集にかなり手間がかかり、問題作成者にかなり負担がかかることになった。例えば、『わくわく』等がすべてデジタル化 (mp3 ファイル、または wav ファイル) されるだけでも、教材作成の負担は軽減されると思われる。

スモールテストのもう一つの問題点としては、ディクテーションという手軽な方法ではなくなったことによることもあげられる。各自がノート等を書いて、教師が巡視しその場で間違いを直したり、ホワイトボードで解答、解説をするという即時性がなくなったこと、成績に関わるために気軽に解答を互いに確認したり、話し合ったりするということが難しくなったことは残念である。さらに問題数がどうしても増え、出題形式もいろいろなので、実施にかかる時間そのものが長くなったことも問題であろう。スモールテストを作る上での教師間の申し合わせで、選択性にしたり、最低限のことは用紙に書き込んでおいたり、語彙や漢字、解答形式などにも配慮して、なるべく時間をかけずに実施できるようにすることになっていたが、どうしても分量が増え、スモールテストによっては 30 分程度かかってしまうこともあった。この点に関しては、スモールテスト実施時間や効果があげられる問題を作るための改良が必要であろう。

とはいえ、課ごと、SD ごとテスト問題を作ってファイル化し、単にそこから使用するというのではなく、そのときそのときの学習者の学習進度に合わせてスモールテストを準備するという作業は、教師にとっても学習者をよく観察し、柔軟性のある授業を生み出す機会にもなり、非常に重要なことではないかと思われる。

3. 日本人学生ボランティアを活用した授業の試み

当センターでは毎学期のはじめに、日本語クラスに留学生の日本語の練習相手として参加してくれる日本人学生ボランティアの募集を行っている。主に、会話授業や受講生が多いクラスを中心に日本人学生ボランティアを活用している。2 学期と 3 学期には SJ3 - 1、SJ3 - 2 クラスでもボランティアを募集し、7 名の学生に授業に参加してもらった。その 7 名は曜日によって参加できるクラスが異なり、ボランティアの学生が参加した授業は許が担当する授業のみであったが、週に 2 コマは必ず日本人学生ボランティアがクラスに参加していた。

日本人学生ボランティアの授業における主な役割としては、SD を勉強する際にペア練習の相手役をしたり、教師とモデル会話をしたり、CD の練習のときにロールプレイの相手役をしたりすることだった。留学生は日本人学生とペアで練習をすることによって日本人のイントネーションやアクセントをまねしたり、練習が終わった後には自由会話に発展させたりして、積極的に授業に取り組んでいた。

また、受講生が多いクラスでは学生が持っている全ての疑問に教師一人が答える時間が作れないことが多かったが、日本人学生との練習の間に疑問点を解決しながら練習に取り組むときもあり、教師にとっても留学生にとっても有効な活動になった。日本人学生にとっては、普段はほとんど考えることのない日本語に関する質問を受け、改めて日本語について考える機会に

なったという。

日本人学生ボランティアへの授業のフィードバックとしては、授業が終わった後、必ず授業担当者の許にメールを送ることにした。その授業の中で疑問に思ったことや留学生の質問に答えられなかったこと、またはその授業で感じたこと、各自の反省点などについて、自由にメールで書いてもらい、それについて許がコメントを送る形でフィードバックを行った。このフィードバックを通して、日本人学生ボランティアは日本語教育についてさらに興味を持つようになり、留学生への理解を深める機会になったように思われる。

このように、日本人学生をボランティアとして活用したことで、日本語のクラスが活発になるとともに、日本人学生は留学生が知り合うことにより、お互いに刺激を与え合うようになった点で非常に効果的な活動だったと思う。さらに、日本語の授業を通して留学生と日本人学生の交流が活発になり、授業外でも一緒に登山をしたり、日本人の家庭を訪問したりするようになり、現在も交流が続いているようである。

当センターでは各学期の日本語クラスが終了する際に受講生に対して日本語クラスについてアンケート調査を実施し、授業評価を行っているが、SJ3 - 1、SJ3 - 2を受講した学生からも日本人学生ボランティアの活動について非常に肯定的な評価が得られた。受講生からは、日本語クラスでボランティアとの会話練習を通して日本語を使う機会が増えたこと、授業以外でも日本人と交流する機会が増えたことなどの回答があり、留学生の側からも積極的にボランティア学生と接触していたことが分かった。

また、ボランティア授業を担当した許が3学期が終了する際に日本人学生ボランティアを対象として日本語クラス及びボランティア活動についてアンケート調査を行ったが、その調査結果についていくつか抜粋して報告する。

<日本人学生ボランティアへのアンケート調査結果>

【日本語クラスのボランティアの経験及び留学生との接触など】

- ・ 日本語クラスへのボランティア参加経験：全員が今年度初めて参加
- ・ 専門分野：日本語教育と関係がある人2名、日本語教育と全然関係がない人5名
- ・ 留学生と接触する機会の有無：まったくない人2名、留学生のチューターなど5名

【日本語ボランティアに参加したきっかけ】

- ・ 日本語教師に興味があったから。自分の将来が明確ではないが、実際の教育現場を見てなんらかの刺激を受けることができれば、自分の将来を考える上で参考になると思ったから。
- ・ 将来に日本語教師を目指しているため、教育現場を体験したかった。留学生の手伝いをしたかった。
- ・ 日本語クラスのボランティアをやっている友達に紹介されて、面白そうだから参加した。

- ・ 以前アメリカで留学したときにたくさんの人にお世話になったので、今度は自分が皆さんの力になりたいと思ったから。色々な国の文化に興味があったから。日本語を勉強するという目的を通じて外国からの留学生と交流したかったから。
- ・ 色々な国の人達と話をし、普段では経験できない体験をしたかったのと、純粋に日本語を教えてみたかったから。
- ・ 長年日本語教師に興味があり、通信教育を受けたことがある。実践の場を体験したかったから。

【日本語コースについて】

○質問：授業に参加して分かったボランティアの役割について

- ・ 学習者は、いくらボランティアといっても、単なる話し相手としてだけではなく、一日本人として、日本語の具体的な知識を求めていると感じました。確かに、日本語ボランティアをする際に、日本人というのは必要条件にはなりますが、十分条件にはならないのではないかと思います。役割も、学習者のレベルや必要に伴って拡大していくのではないかと思います。画一的なボランティアでは不十分なのかもしれません。
- ・ 日本語での例題の見本を見せたり、分からないところの質問に答えたりするアシスタント的な役割をしたいと思います。生徒さんたちが、分からないところがアシスタントを通じて分かるようになったといってくれたからよかったです。
- ・ 日本語教育に関する知識や経験が全くなかったので、あくまでも先生のサポートや留学生の練習相手になれればいいと思っています。
- ・ 最初は、留学生の質問に答えたり、先生のサポートをすることだと思っていました。しかし、ボランティアを通して考えが変わりました。自分が日本語を使っているのは、文法などを考えずに、無意識で使っているのがとても難しかったです。
- ・ 留学生の日本語の会話相手となって日本語を話す機会を作ってあげることがボランティアの役割だと思っていました。しかし、ボランティアも留学生にとっては日本語の先生の一人であることを気づかされ、質問の答えには責任を感じました。
- ・ 会話の練習相手が主な役割だと思っていました。先生が教えたことの実際の練習の場の補助員という立場を考えていました。しかし、学生の頭の中にどんな知識が入っているのか全体の把握ができていない状態でかえって学生を混乱させたかもしれないという不安があります。

○質問：日本語のクラスで一番面白かった活動は何ですか。

- ・ 会話の練習です。留学生の話し相手になることが一番楽しくてよかったです。逆に、文法練習などになると、「なぜ」という質問が多くなり、答えることができなくて自信をなくしてしまいました。

- ・ 文法練習のチェックです。お互いに間違いを指摘し合って、練習を楽しみながら行うことができていました。
 - ・ Oral test のチェックは留学生の考えが分かったり、直に留学生と話をすることができる時間が比較的多く取れたので楽しかったです。
 - ・ Oral test のチェックが面白かったです。テキストにはない留学生が作ってきた文章だったので、それをチェックすることは本当に楽しかったし、実際に自分で作るから質問が多かったためです。
 - ・ オーラルチェックが一番面白かったです。日ごろの練習問題からは思いもよらないような間違いや発見があったからです。
 - ・ どれも面白く参加させていただきました。
- 質問：ボランティアをする前とした後で、留学生や日本語教育への見方がどのように変わりましたか。
- ・ 日本語が話せるだけでは不十分だと改めて感じさせられました。でも、留学生は前よりもずっと身近に感じるようになりました。
 - ・ それぞれのレベルに合わせて日本語の授業が組まれていて、スモールステップなので、生徒さんも理解がしやすいと感じた。
 - ・ 一生懸命、日本語を勉強している姿は日本人である私にもとても嬉しく、また将来海外で学びたいと考えている私自身にもとてもよい刺激になりました。日本語教育はとても難しいと思いました。日本語そのものについてはじめて真剣に考えたように思います。
 - ・ 留学生に対する見方というより日本人の友達に対する見方が変わりました。留学生に接するとき、ことばが通じない分、気を使います。気を使うといっても大げさなことではなくて誠意をもって接するということですが、そのことが日本人の友達に対してかけていたように思われるからです。相手が日本人で言葉は通じるし、気は楽だし、自分のことも分かてるだろうと思い、相手に対する気遣いなどをしていなかったことに気が付かされました。日本語教育に関しては自分が使っている言語を教えるのなんて簡単だと思っていましたが、とんでもないことだと分かりました。自分が意識して使っていないことをきちんと自覚して、考えて見なければ教えることなんてとてもできるものではないと思いました。
 - ・ 留学生に関しては、自分の専門分野を持ちながら、一生懸命日本語を勉強している様子に感動した。
 - ・ 未経験の時には「教えることは難しい」という不安の気持ちがとても強かったですが、今は「簡単ではないけれど一緒に学ぶことは楽しい」というプラスの気持ちが大きくなったことがあるかと思います。

以上のアンケート調査結果からも分かるように、日本語クラスにおけるボランティア活動は、単に留学生の日本語の会話相手にとどまらず、日本人学生には母語である日本語について振り返る機会を与え、留学生には日本語授業以外にも日本人との交流を行う場を提供することができた。今後も日本人学生ボランティアを積極的に活用した日本語クラスの運営について取り組む必要があると思われる。

4. おわりに

本報告書では 2004 年度の当センターの補講授業の中で SJ3 - 1、SJ3 - 2 クラスの運営について、スモールテスト実施、日本人学生ボランティアを活用した授業運営に焦点を置いて報告を行った。スモールテスト実施は SJ クラスでは新たな試みであったが、出席率の向上、復習及び予習の動機誘発、学習項目理解度を確認、という意味で有効であった。しかし、教師の負担や授業時間の配分など改善すべき点も残されている。各クラスの受講生の人数や学習状況に応じてスモールテストの実施方法やテストの内容などを変更しながら改善を図る必要がある。

また、初級日本語クラスにおいて日本人学生ボランティアを活用し、留学生に日本語を使用する機会を増やす試みは、留学生にとっても日本人学生ボランティアにとっても非常に有効な活動であった。留学生にとっては日本人との会話練習を通してよりきめ細かい応用練習が可能になり、日本人学生ボランティアにとっては留学生との交流を通して母語である日本語を振り返り、留学生との交流が広がった点で双方にとって刺激を与えあう良い機会になったと思われる。

本報告では、初級日本語クラスにおけるスモールテストの実施及び日本人学生ボランティアの活用を中心に報告を行ったが、残された問題点を改善し、より活発で有効な日本語クラスの運営方法について模索していきたい。

参考文献

加納千恵子 (2005) 「日本語教育の多目的化及びモジュール化」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』20 : 93-108

<資料1> 到達目標のハンドアウト

L20 の目標 The purpose of Lesson 20

【文法 Grammar】

- 1 . (~V-ta) ことがある have (experienced ~)
- 2 . { S1 } とき { S2 } at the time of、 when
- 3 . ~ば if~
group 1 verbs -e ば
group 2 verbs re ば
group 3 verbs すれば、 くれば
- 4 . (plain form) かもしれない may ~ / might ~
- 5 . ~すぎる too (adjective)
[V (base)]
[A (without い)] + すぎる
[NA (without な)]
- 6 . ~かた how to
V base(-masu form) + かた

【会話 Oral】

作り方 how to make / 使い方 how to use

《Oral test》

2005年2月25日(金曜日)

1. 「ことがある」^{つか}を使って、自分の^{じぶん}経験^{けいけん}を^{はな}話してください。
Please tell about your experience using “ ことがある ”。
2. 「～ば」^{かんが}を使って、自分の^{かた}考え方を話してください。「～かもしれません／～と思います」
を使ってください。
Please tell about your opinion、 using ~ば / ~かもしれません / ~と思います。
例) いっしょうけいめい日本語をべんきょうすれば、日本語がじょうずになると思います。

<資料2> Small Test (21課)

Small quiz L21 SD4-6 (9/16 復習分)

2004.09.21

なまえ _____

1. 例のように書いて、_____ でつないでください。

例) (いそがしかったです) いそがしくて . よかったですね。

わたし りょうしん てがみ
私の両親から手紙が(きました) . たいへん . 大変でしたね .

たくさんともだちともだち友達が(できました) . ざんねん . 残念ですね。

パーティーに(行けません) . かなしいです。

ペットの猫がねこ(し死にました) . うれしいです。

2. () のことばで、「~ようになる」か「~ようにする」の文を作ってください。

例) 1歳のとき、(ある) (歩く) 歩けるようになりました。

にほん 日本に来てから、にほんご 日本語が(わかる) _____

じかん 時間がありませんから、(おく) (遅れない) _____

としょかん 図書館では、ちい こえ 小さい声で(はな) (話す) _____

まいにちれんしゅう 毎日練習したので、じてんしゃ 自転車に(の) (乗る) _____